

新

9

2018

创刊号(1)



目分量

能村 研三

異常な気象

魚市場滑走しくる角氷
甚平や生活はなべて目分量

見ゆる嶺見えざる嶺や夏燕

星涼し鱈を収めて寝まりけり

今年の夏は異常気象のせいか例年にな
い暑さに見舞われた。猛暑、酷暑、極暑、
激暑とさらにその上の暑さを言い表す言
葉があるとすれば「超暑」とでも言うの
か。それに加えて西日本を襲った豪雨に
より大きな被害がでた。気象庁から発表
される予報でも「これまでに経験したこ
とのないような」「直ちに命を守る行動」
というような、やや抽象的な表現をよく
耳にした。「これまでに経験したこと
のない」と言っても八十代の人と十代の人
では、これまでの経験の数値が違っし、
どこに基準を合わせたことばかもはつき
りしない。気象庁に苦言を言ったところ
でも詮無きことだが、「異常な暑さ」「異
常な豪雨」もこのへんで許していただき
たいものだ。

日本は南北に細長く、周囲を海に囲ま
れていて、その絶妙な地理のおかげで季
節ごとにさまざまな気象現象があり、地
方によってその特色もさまざまだ。気象
現象の特徴を描写することばが日本語に
はとても多く、俳句を作るものにとつて
はありがたいことだ。そのどれもが美し
い響きを持っていて、先人たちが気象現
象を利用して生活を営む以外にも、感性
豊かな表現を楽しみ、私たちに伝えてく

ひかり風整はぬまま梅雨明くる

浪の音昼寝のいつか深寝入り

朴の葉に風揉みのきず夏果つる

盆東風や畳廊下に樟の影

土蔵より走り穂の風聴き分くる

I
T
に
関
け
て
八
月
大
名
ぞ

れていたのだ。

かつて倉嶋厚さんというテレビの気象解説者がおられた。倉嶋さんは「熱帯夜」をはじめ、いろんな表現を考案された人で、いろいろな著書がある。倉嶋さんの言葉の「三月の風と四月の雨が、五月の花をつれてくる」は日本の微妙に変化する季節を捉えている。

雨にまつわる言葉だけでも千を越えるそうだが、秋に降る雨でも「秋霖」「秋雨」「白驟雨」「すすき梅雨」など詩歌の表現にも相応しい言葉がたくさんある。

これから「野分」「台風」の季節となるが、穏やかに大地を潤す雨であってほしいものだ。

発想の

鮎の腸

森岡 正作

女系家族に父の夏帽残りけり

味噌甕の底まで浚ふ朝曇

出航の舳先に立ちて夏帽子

人さらひ未だに怖し大夕焼

世を疎み水母は月を窺へり

背を向けてより螢火を寂しめり

父祖の地を手放し鮎の腸苦し

今年の暑さは特別と言われているが、私は暑さにかちき弱い。汗が噴き出すと、家ではすく上平身裸になり、すこし解放された気分になれるのであるが、その分娘らの冷たい視線に耐えねばならない。

登四郎先生に「発想のひしめく中の裸なり」という句がある。暑いので裸になって句を作っていると、発想が押し寄せるように湧いてきたというのである。私の裸になる言い訳にしたいが、なかなか生半可な身にはこうはいかない。

しかし、裸になって気持ちも姿勢も正してみると、不思議なもので、どんと胆が座ったような気になる。失うものはないと、自ら退路を絶つ構えで、ひしめく駄句の中の、きらりとした一句を仕留めたいものである。

能村登四郎の軌跡〔1〕

能村 研三

くちびるを出て朝寒のこゑとなる

『定本咀嚼音』昭21

秋も少しずつ深まってくると朝夕はことさら冷えるようになり、特によく晴れた日ほど朝は肌寒さを感じる。思わず出た「今日は寒いね」という自分の声に冬の気配を感じた。声は声帯から発するものだが、肉体の一部である「くちびる」から声を発したという捉え方に実感があり人間の感情を顕わに映しだした。登四郎は昭和二十一年に「馬酔木」に復帰しているが、翌年の十二月号で戦後初めて三句入選した中の一句。昭和四十九年に刊行された『定本咀嚼音』の巻頭に置いた句である。

ぬばたまの黒飴さはに良寛忌

『定本咀嚼音』昭22

ぬばたまは「射干玉」「野干玉」とも書き、実が黒いことから黒にかかる枕詞である。良寛という子供と遊ぶ素朴でやさしいイメージ、良寛は子どもたちのためにいつも飴をたくさん袂にしるのばせていたことだろう。ちなみに新潟の柘谷小路にあった商家、飴屋万蔵家の看板は良寛が揮毫している。この句の一連で昭和二十二年三月号の「馬酔木」では秋櫻子の激賞を受け初巻頭を得た句だが、波郷からは風雅を主張した俳句は戦後新人の作る句ではないとの批判を受けた。「朝寒」の句と同様定本で復活した句である。



うすうすとわが春秋に飢もあり

『定本咀嚼音』昭23

この年は「馬酔木」で巻頭を三回とり「馬酔木新人賞」を藤田湘子と同時に受賞するなど輝かしいこともあったが、登四郎の心は暗れるものがなかった。ここで詠んだ「飢」は「心の飢渴のようなものでなく真実の飢えである」と登四郎は述べているが、戦後間もない食糧難の時代で、私も幼い頃よく母からは配給だけで生きられず、闇市や買い出しに頼る生活を強いられた苦勞を聞かされた。前年に次男勤二を生後二か月で亡くすなど、人の心はなやかに浮き立つ春であっても登四郎はふっと悲しみに襲われることがあった。

逝く吾子に万葉の露みなはしれ

『定本咀嚼音』昭23

昭和二十三年八月二十五日に長男爽一を六歳で亡くした。疫痢に罹り一夜のうちに死んでしまった。自らの貧しさの故か、この時代の医療の不完全からなのか、登四郎は悔いることが多かった。私には兄にあたるが、私の誕生の前なのでまみえることはなかった。菩提寺の墓で眠る小さな骨壺を見た時初めて私の兄としての存在を意識した。「万葉の露みなはしれ」とは小さな愛しい子を亡くした胸がつぶれるような絶唱である。同時作に〈露ふふむ柔ら髪とも別るるか〉〈何も言はず妻倚り坐る夜の秋〉がある

蒼茫集



約 束 細川洋子

火星 人 内山照久

銀磨く布の黒ずみ梅雨晴間
錫皿の槌打ちの波涼しかり
夏至の夜のそこはかと無き白さかな
一隅の十葉を道しるべとす
* 咲いてすぐうつし世のいろ梶子は
約束を違へぬ空蟬のかたち

母の顔 頓所友枝

ラムネ玉未だ出口の見つからず
後から口笛のくる梅雨の月
教師から母の顔へと夕焼道
線香花火ちりちり帰心生まれけり
帰省列車うしろ二輛を切り離す
* 海月浮くジェンダーフリーの世となりぬ

自衛官募集の掲示花ざくろ
* 噴水は動く彫刻風が彫る
大いなる明日生る予感雲の峰
かき氷崩す和服の袖たもと
火星人水の地球へ降り海月
書かざれば漢字忘るる茄子の花

布衣の交はり 千田百里

俳諧は布衣(ふい)の交はりいと涼し
絶妙な配置テレピと扇風機
* 炭酸の泡のつぶやき巴里祭
水無月や衣裳黒子を持って余し
滝の前いつしか棒になつてをり
由布岳を支へて青田波盛ん

星涼し 辻美奈子

星涼し夜の入口に錠のなき

* 紫陽花のをはりは風の色となる

糊つよきシューツ夏越の夜ならば

夏の浜さあ何もせぬことをせむ

少年と青年のあはひの裸

ひとにある胎内記憶ハンモック

明易し 吉田政江

潮の香に梅雨の気配や沖ぐもり

西瓜へ刃入るる一瞬地震走る

* 蚕豆の莢どれを剥いても過保護

シャーベット早口の子の食べ上手

眠くなる児の手の弛み合歓の花

一蹴りの明暗に酔ひ明易し

四万六千日 楠原幹子

* 四万六千日保存食入替ふる

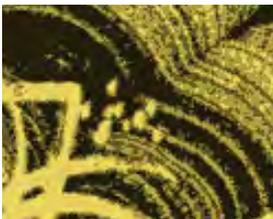
朝ぐもり駅のはき出す無表情

木下闇抜けきし水の声をあぐ

サッカー燃ゆ短夜さらに短くし

たましひのふはりふはりと海月かな

藤椅子や父の逝きたる齡となり



潮鳴集



日 盛

大矢恒彦

草刈つて動かぬ風の生まれけり
勝敗は零に始まる雲の峰
掛軸に無の字の大書夏座敷
* 日盛のゆがみ無音のダリの街
少々の顔の改竄サングラス

水の天井

平松うさぎ

重心の傾くトルソー夏至の夜
あめんぼう水の天井凹ませり
身代りとなる形代の薄さかな
水陽炎纏ふごとくに羅の衣
* 空豆の一番端に子供部屋

地球の鼓動

本池美佐子

磯を打つ男波女波や枇杷熟るる
盲導犬の淡々とゆく夏の雨
滴りや森の匂ひを閉ぢこめて
* 湧水は地球の鼓動夏つばめ
東山連山借景夏座敷

江戸神輿

森村江風

浅子てふ屋号名残の江戸神輿
* 技絶えし老舗に広き夏座敷
彫師塗師仏師窮みの江戸神輿
神輿屋の板間涼しや玻璃戸越し
峰雲の底にしきりと棧瓦

飛鷹選評



龍村 研三

言ふなれば犠打と敵失走馬燈 大久保志遠

走馬燈の影絵が回って見えるように、これまでの人生で経験したことが影絵のように蘇ってくる。「敵失」も「犠打」もいずれも野球用語だが、人生においてもこの言葉が適う場面が多々あることは確かだ。「敵失」はライバルや反対勢力がそれ自身で犯してしまった失敗のことである。長い人生では失敗はつきもので自らの敵失のために他の人に迷惑をかけてしまうこともある。「犠打」はバンドまたはフライによって打者はアウトになるものの走者を進塁させることが出来る。人生の中でも時には犠打を打つことで他の人のために貢献出来ることもある。

水打つて人の集まるなんでも屋 西村 渾

昔は田舎へ行くと「万屋」とか「なんでも屋」と呼ばれる店があった。多様な商品を扱っている店で、「よろず」とは万と書き、「あらゆるもの」という意味を持っている。規模はごく小さく、駅前や街角にあつて様々な食料品や日用雑貨が売られている店で、現在のコンビニエンスストアの前身とも言える。田舎では人が一番集まる場所、交流が盛んに行われていた。なんでも屋の店先はいつも主が水を打って涼しく客を迎えてくれた。

夏炉焚く上り框の黒電話 大橋 松枝

今の世の中のように携帯電話がこれだけ普及すると、固定電話の存在感が失われてしまう。しかし夏炉を焚いてくれる山あいの宿では、何か昔懐かしいもてなしを受けて心を癒してくれる。上り框には都会では見られなくなった黒電話が置かれていて、にわかに昭和の時代が蘇ってきた。

四万六千日まだまだ居るぞ悪いやつ 大網 健治

大網さんは主流におもねることのない独自の視点で作句している方なので、コンスタントにアベレージは稼げないものの時折大きなヒットを飛ばす。「四万六千日」はこの日に参詣すると一日で四万六千日分をお詣りしたことになると言われていた。そんな御利益をよそにこれを掻い潜るように世の中には悪いやつがいることに焦点を当てたのは面白い。

嘴のわたしわたしと燕の子 大石 恵子

燕は初夏から晩夏にかけて二度産卵する。それぞれ一番子・二番子と呼ぶ。五月になると巣の中で一番子の四、五羽が黄色い嘴を大きく開けて親が運んでくる餌を待つ。産毛に真ん丸な目があどけない雛たちも、親が近づくと一齐に口を開け、我先にと餌をねだる。中七の「わたしわたし」との表現が可愛らしい。

編み上ぐる家族のかたち鳩浮巢 稗田 寿明

鳩は沼湖などに浮かべて巣を作る。葦や水草を集めて作り、葦の茎などからめて漂わないようにする。雌雄交互に抱卵し、雛がかえってからもしばらく巣に留まる。雛を背中に乗せて巣の辺りを泳ぐ姿はかわいらしい。浮巢で抱卵に育児にと仲睦まじく、いのちを輝かせている家族の姿に思わず見惚れてしまった。

沖作品



能村研三選

* 早苗饗や越の笹餅鋤に盛る

嘴黒くなる子燕に未知の空

梅雨明の光廻して蹴轆轤うんたじめ

言ふなれば犠打と敵失走馬燈
水打つて人の集まるなんでも屋

* 峰雲を掴み切つたるクレーンかな

回り道これも人生走馬燈
船頭の水棹の軽し花菖蒲

風浪に古沼の浮巢たぢろがず
浦の民守る姥神はまおもと

* 夕風を水脈ひとすぢに舟帰る

継ぎ目なき上州武州麦の秋
腰太き女人先行く登山靴
夏炉焚く上り框の黒電話

愛知

大久保志遼

千葉

西村 渾

埼玉

大橋 松枝

* 夏至の日や岩波文庫の朧紐

梅雨上がる大団円の雲走る

国破れめつきり減りし蠅の数
厨より厨に回り熱帯夜

溜池を斜にながむる茶山かな
喜雨の来て露地栽培の充たさるる

山梔子の真白き香り御堂の辺
嘴のわたしわたしと燕の子

* 太郎冠者でて身のかるし夏袴

いつの間に短夜の夢見果つるか
編み上ぐる家族のかたち鳩浮巢

てつぺんに続きありけり立葵
アイスキャンデー木の棒は木の味したる

先生と呼ばれし親父三尺寝

東京

大網 健治

大分

大石 恵子

千葉

稗田 寿明